

平成25年度第2回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成25年9月4日（水）

午後1時～3時

会場：県立図書館 研修室

テーマ1 「子育てを応援する家庭教育支援」について

- 子育て中の保護者や、将来親となる中学生・高校生等に「親としての学び」や「親になるための学び」を展開する学習プログラムはどうあればよいか。

議 長 事務局より学習プログラムの作成について、説明をお願いする。

事務局 〔説明〕みやざき「親学び」プログラムについて

- ・「県民総ぐるみ教育フェスティバル」におけるプログラムを活用した取組について
 - ・講座の基本的な流れ、作成する資料、取り上げるテーマ（案）と対象について
- 委員の皆様のご意見をいただき、宮崎ならではのプログラムを作成したい。

議 長 協議に入る前に、8月に行われた「県民総ぐるみ教育フェスティバル」の家庭教育の分科会において、みやざき「親学び」プログラムの原案を活用した講座が実施された。参加された委員にその時の感想をお願いする。

委 員 知らない人と話ができ、参加した人は自分の必要なものを見付けることができるということで、レクチャーで話を聞いて、共感できるものだけを持って帰るよりも、体験が加わることで講座自体が活性化していた。その上で参加者が自由に話ができ、出会いがあった。

これからもつながりたいと思う人はメール交換もできるし、親の孤立感がなくなると思う。親が悩みを話したら、実施する意義があると思うし、それを聞いた人にも意義があると思う。参加型の学習は多方面からのメリットがあると思った。楽しかったというのが最後の感想である。ぜひ取り入れたい。



議 長 県で実施するとそういうメリットがある。各市町村から集まって、出会いがあって情報交換ができる。

全国各地の自治体で「親学び」のプログラムが実施されているが、宮崎には宮崎の風土・土壌があり、宮崎で大事にしたいと思うこともあると思う。それぞれの地域で体験されたことも含めて、ご意見ををお願いする。

- 副議長** 委員でテーマを設定して、具体的なプログラムは事務局が原案を作成するのか。
- 事務局** 今回は委員の皆様にはテーマについて検討していただきたい。具体的なプログラムの原案は、次回以降に事務局より提案させていただく予定である。
- 議長** いろいろな対応ができるプログラムがあった方がよい。地域性、構成も様々である。それに応じたプログラムを作成すると活用できる。
- 副議長** テーマを変えても使える進行セットを作成するとよい。何を決めたらよいかという点については難しいところであるが。
- 委員** 本来、ワークショップは参加した人でつくっていくものである。マニュアル通りに進めて、ここに落ち着くということが、あらかじめ決められていては、ワークショップではなくなってしまふ。進め方だけを基本にするのであれば、テーマは何でも取り入れられる。
- 事務局** 実際の講座の流れの基本は変わらないと思うが、子供の発達段階に即した適切な学習テーマはどのようなものがあるかについて、ご意見を伺いたい。
- 議長** 確認になるが、宮崎県の保護者の実態をみて、こういうものが不足しているので、こういうテーマを設定してプログラムを作成し、それを全県下に普及して浸透させていくということではよいか。どういう点がテーマとして大事かということではよいか。
- 委員** 学習メニューという捉え方でよいか。
- 議長** ここに提案されているテーマはそれぞれ大事なものであると思うが、これにプラスしてということも含めてご意見を願います。
- 委員** 地域の関わりという視点が必要だと思う。子ども会など地域との関わりが今、だんだん薄れてきているので、親子が地域で盛り上がっていくものもほしいと思う。
婦人会も少なくなって地域をまとめていく活動もなくなっていると感じる。近所の子供を見守ることが不足していると思う。
- 議長** 地域向けのプログラムということではよいか。
- 委員** 地域とのつながりは、保護者の価値観や関わり方で決まってしまう。両親とも働いていて、地域活動への参加が難しいという状況があるが、親が地域に出て行こうと言えば、子供も参加すると思う。そのような方向になるよう検討するとよい。

委員 仕事で4歳の子供からレッスンをしているが、小学校低学年までの子供を見ると、親が「子離れ」をしていないために子供が自立できていないと感ずることがある。

保護者に、子供を早めに自立させるような指導ができるとよいのではないかと思う。



委員 幼児期から小学校低学年の子供たちに、ゲームやパソコンが必要なかと思っている。この点についても取り上げてほしい。

委員 子供とメディアの付き合い方は、乳幼児期から必要だと言われている。原案には、「親子のコミュニケーション」が取り入れられているのが、「親同士のコミュニケーション」も必要だと思ふ。乳幼児の子供をもつ親の一番の問題は孤立感ということがあるので、親同士が仲間をつくる、「子育て仲間」というような大人としてのコミュニケーションスキルのプログラムも必要だと思ふ。

委員 泥遊びなどの自然体験を子供が小さい頃から取り入れられるとよい。親自身が経験していないことも多いのでぜひ投げかけたい。

議長 「家庭の日」の推進と併せて進められるとよい。「なぜ家庭の日が大切か」ということを学習の中でセットで行えるとよい。

委員 親同士のコミュニケーションとか自然体験の必要性についての意見が出されたが、子供をもつ親向けのプログラムということから考えると、それらをどのようにしたら手に入れられるのかという情報や、それぞれのテーマに関するNPOや行政機関などの存在を保護者に伝える機会を積極的に設けた方がよいと思ふ。

関心のあるテーマの学習に参加した後に、アクションに移るための情報を得られるところや相談できる人を知るだけでも、心が軽くなる保護者もいると思ふ。このようなことをパッケージ化していく必要があると思ふ。

また、例えば子供が犬や猫を拾ってきた時に、親がどのような対処をするかで、「命」についての教育がなされるかどうかにつながる。動物愛護の学習が授業の中で行われるとすれば、教科書と「親学び」プログラムを連動させるとよい。子供が学校で学んでくるタイミングと合わせて、親も学ぶことができると相乗効果が期待できると思ふ。

委員 いろいろな地域の家庭教育学級に出かけていった際に、発達障がいのある子供さんをもつ保護者のネットワークがないということ保護者からよく聞く。小さなネットワークはあるが、それを県でプログラム化されるとよい。参加体験型の学習の中で、発達障がいのある子供さんをもつ保護者同士が話し合えるとよい。

委員 社会体験の中に、子供が自分の活動範囲を広げられるように、公共交通機関の利用を実体験できる機会を設けてほしいと思う。例えば、市のフェスティバルに子供が参加したいと思っても、保護者の送迎が条件になっていて参加できなかったということがあった。自分があそこに行きたい、こんなことがしたい、情報が欲しいという時にバスを利用することができれば、能動的に行動することができるようになる。そのような機会を保護者がつくってあげることが重要だと思う。

委員 プログラムの中に「親の大変さ」だけでなく、「親の愛情」という内容を加えてほしい。

委員 思春期は自分の存在が不安定になる時期であり、ここでの親の関わりが重要になってくる時期である。親が子供の存在をきちんと認めて、子供が自分の存在を肯定していけるような親子の関係をつくりたいと思う。自分の存在を肯定していくと、自分を大事にする、他人を大切にすることにもつながっていく。

「我が子のよさを見つめ直そう」という親の関わりが教育できるとよい。子供が自己肯定感を感じる、親が子供のよさを見つめるというようなプログラムがあるとよい。このことが核として必要であると思う。

委員 プログラムの原案に「言葉の力」という内容があるが、言葉にもっと気を付ける、意識的に言葉を使うということが大事だと思う。小学校で問題になるのは、心への働きかけと食育が乱れていることだと感じている。食育は栄養の問題だけではなく、雰囲気やコミュニケーション、食卓を大事にするというようなこともある。また、小学生の保護者が悩んでいることは携帯電話とゲームである。これは外せないと思う。

委員 幼児期の子供については、地域の皆さんも注目して支えていこうという意識があるような気がするが、小学校に入学すると、家庭のことには入りにくいという雰囲気がある。

行政としても、小学校入学までは母子健診など支援が充実していると思うが、学童期になると学校や教育委員会だけの支援になるような感じがする。この時期の子供は、親の言うことは聞かないが、他の大人の言うことは聞くとか、親から誉められても素直に喜ばないが、他の大人に誉められると嬉しがったりするところがあると思う。

地域とのつながりは、幼少期から年齢に関係なく必要不可欠であると思う。その必要性を感じていない親子もいると思うので、どの対象のプログラムにも盛り込んだ方がよい。

委員 私が宮崎に帰ってきて「いいな」と思うことは、地域のつながりが宮崎には残っているということであり、いろいろな活動の背景に見えてくる。これを大事にしていくべきだと思う。

宮崎県ならではのプログラムをどのように作るかというときに、他の地域と何が違って、何を大事にしていくか、何が足りないのかということをしつかり見据えた上で、設定していかなければならない。地域とのつながりを大事にしていくというプログラムを、各成長段階に応じて必ず位置付け、一貫性をもてるようにするとよい。このことが宮崎のよさを生かしたプログラム作りになる。

副議長 どのような宮崎県型の学習プログラムを作るかということを考えなければならない。体系的なプログラムを作ることが必要である。「誰を支援者とするか」「誰を支援する対象とするか」「支援の場をどこにするか」「支援の方法をどうするか」という4つを考えればよいと思う。

「支援の方法」の一つにワークショップがあり、その他にも異世代が集う座談会、一対一の相談会など、支援の方法をいくつか検討した方がよいと思う。

「支援の場の設定」としては、宮崎ならではの点から、地域での支援の場をつくっていくということ、子ども会や自治会、婦人会などが出てくれるような場の設定が考えられる。また、将来親になる世代向けのプログラムということでは、学校に出かけていくということも大事だと思う。

「支援する対象」としては、親や子供たち、「支援者を誰にするか」ということでは、地域や祖父母とすることで、宮崎ならではのプログラムができると思う。

今の議論は、どういう形のプログラムを内容に盛り込めばよいか、誰を支援者とすればよいか、どういう支援をしたらよいかということが混在している。プログラム全体としては、どういうプログラムにすればよいかというときに、支援者、支援する対象と場、支援方法の4つで宮崎ならではのプログラムを作ってはどうか。このプログラムは実際型で、社会教育の中では他にないものであり、参加体験型にしたいという思いは皆さんにあると思う。

事務局 今回は、参加体験型のプログラムを作りたいということからスタートしている。これまでにもいろいろな形で家庭教育支援を行ってきたが、今回は、誰でもどこでも、また、誰がリーダーになっても使えるプログラムを作って、これまで参加しなかった人も参加できるようにしたいと思っている。このような学習プログラムに先進的に取り組んでいる県はあるが、議論の中でも出てきたように、宮崎の実情に合った、宮崎らしい学習プログラムを作っていきたいと思っている。その中でも特に優先して取り組むべき内容について、ご意見を伺いたい。

副議長 ワorkshop型のプログラムを作成することは確定している。議論の方向性として、支援者を誰にするか、支援の対象を誰にするのかということプログラムの中に明確に盛り込んで、体系的に説明できるような議論をしていけばよいと思う。

事務局 プログラムを活用する場としては、例えば、保護者を対象にする場合は学校の家庭教育学級や一日入学など、福祉部局と連携して実施する場合は乳幼児健康診査など、地域では子ども会の会合などを想定している。

対象としては、保護者はもちろん、将来の親世代である中高生、大学生、未婚の青年などを考えている。これに加えて、子育ての先輩である祖父母や地域の方などに、いろいろな会合の際に実施していきたいと考えている。

副議長 長きにわたって、地域で取り組むということはよいと思う。いかに具体化して皆さんに示していくかという議論を私たちがしていけばよいと思っている。

委員 保護者、将来の親世代、祖父母、地域という横のつながりのプログラム、そこに柱を立てるのが宮崎型のプログラムだと思う。提案として、先の「県民総ぐるみ教育フェスティバル」で示されていた「つなぐ」ということを柱にして、そこから宮崎型のプログラムを作っていくとよいと思う。「自然とのつながり、人と人とのつながりを進めていこう」ということではどうだろうか。

委員 将来の親世代向けのプログラムを二つに分けて、近い将来に親になる高校生や大学生向けのプログラムを作ってほしいと思う。また、高校生や大学生の子供をもつ親向けのプログラムも必要だと思う。

議長 いろいろな意見が出されたが、宮崎の土壌・風土に合ったプログラムの開発が大事だと思う。

委員 小学校高学年・中学生は、子ども会では地域の「インリーダー」と呼ばれる、リーダーシップを発揮する子供たちが存在する年齢である。しかし、保護者や地域の方が活動を目の当たりにすることがないので、それを知ってもらう機会が必要だと思う。地域に根ざした活動をしている子供たちがいることを知れば、自分の子供もそこに送り出してみようと思う保護者も出てくるのではないかと思う。また、その活動を通して、地域の方が地域を知ることにもなるので、そういう機会もプログラムの中に入れてほしいと思う。

議長 そういう点でも地域とのかかわりがあるということである。

委員 自分の経験から、子供が小学校に入学した当初に、「PTAとは何か」ということを先生と一緒に議論する学習があるとよいと思う。

委員 プログラムの原案に、先生と保護者の関わりが見えてこないことが気になった。先生と保護者の関わり方という問題もあると思うので、この点についての内容があるとよいのではないかと思う。



委員 以前、「家族の大切さ」というテーマで講演の依頼があった際に、親が家族をどういう風に見て、どのようなことをするのか、一人の親という個人ではなくて、家族の力を活用した「家族の役割」というテーマが入るとよいと思った。

「家庭」ではなく「家族」というプログラムがあると、家族の強み・足りないところを見つめ合わせて、家族の力をうまく活用しながら子育てをしていくという考え方ができる。

委員 将来の親世代の中高生が見ている「親」の姿というものは、自分の親であると思うが、自分が親になったとき、どんな親にならなければいけないか、ということが一番大切ではないかと思う。

こんな大人になった方が良いということで、例えば、常識がある人だったら正しい言葉遣いやあいさつができる、自立している人なら料理、洗濯など自分の管理ができる、人の気持ちがわかる人は、コミュニケーションが上手にとれるということなどが加わってくる。

理想の親はどういう親なのかということを知ってもらうのは、中高生の年代ではないかと思う。その世代に向けたプログラムを作っていくのが早いのではないかと思う。

委員 中高生向けのプログラムを、どこでどのように実践していくのかが見えない。

事務局 例えば家庭科の授業で「家族」という内容があれば、その関連で活用してもらったり、宿泊学習の際に活用してもらったりすることを想定している。

議長 市町村では、高校生が集まる機会もあると思うので、そういう機会も捉えられると思う。学校ではなかなか実施できないのではないかと思う。

委員 家庭科での実習関係は、小中学校で充実させて、高校では親としてのあり方、家族のあり方などについて学ぶことが重要だと思う。

委員 宮崎県は離婚率が高いので、そういう状況を捉えていく必要もあるのではないかと思う。

委員 肯定論的なテーマを設定して進めていくのが良いと思う。

議長 家庭と地域の役割、社会教育と学校教育の役割がある。それぞれが機能して良い人材が育つと思う。

委員 教育課程の中で「家族」というテーマを設定して進めていくことも一つの方策であると思う。そういう形であれば活用していけると思う。逆に、地域で子供たちを集めて行う、社会教育的なアプローチの方が難しいのではないかと思う。

委員 晩婚化が進む状況では、「家族」ということにふれる機会が少なくなる。先ほども意見が出されたが、高校生や大学生向けのプログラムがあった方がよいと思う。

委員 核家族化が進み、祖父母と同居する人は少なくなっている。仕事をするなら子供を保育園に預けなければならず、子育てをする上では厳しい面がある。

私は子供夫婦と一緒に生活しているが、良い面がたくさんある。大家族で生活することのメリットを伝える場があるとよい。祖父母の手助けで子供が健やかに育つということになれば、親も安心できると思う。また、一緒に生活するとよい知恵も教わることができる。



議 長 全体的に言えるのは、当たり前なのが当たり前に行える社会、みんなが自然体で日常生活を送ることができる社会にすることが大事だということである。

委 員 まずは、幼児期から小学校低学年の子供をもつ親向けのプログラムをしっかりと作ることが大切だと思う。この時期の学びができればその後につながっていくと思う。あまり対象を広げず、焦点化した方がよいと感じる。

委 員 シニア向けということで、以前、「孫育て講座」ということに取り組んだことがある。
親が子育てしやすい環境を支援することが、シニアの役割だということが押さえられていればよいと思う。この点をシニアの方に確認していただくことは必要だと思う。地域向けのプログラムについても同様のスタンスで考えてほしいと思う。
具体的には、親を批判しない、どうすれば親が育てやすいかを見守るなど、親をサポートするシニア・地域であってほしいということである。

委 員 小学校高学年・中学生の子供をもつ親向けのプログラムで、子供の反抗期についてはよく取り上げられると思うが、親の子離れ、親が自立していくということを考えておかないと、子供の自立を妨げてしまうことがある。また、親の孤立を防ぐために、親同士の横のつながりがもてるようなプログラムがあるとよいと思う。

議 長 いろいろな意見が出されたが、事務局でまとめてもらい、学習プログラムのネーミングについても次回、協議していきたいと思う。

テーマ2 「社会教育活動の活性化を図る 新しい社会教育行政のあり方」について

- 若者がそれぞれの団体やグループで取り組んでいる活動をつなぎ、社会教育活動全体の活性化を図るための支援はどうあればよいか。

議 長 テーマ2について、まず事務局から説明をお願いします。

事務局 若者がそれぞれの団体やグループで取り組んでいる活動をどうつなぐかという点について、昨年度の提言にもあったプラットフォームの考え方も含めて、社会教育活動全体の活性化という視点からご意見をお願いしたい。

議 長 将来の宮崎を担う若者をどう育てるかということであるが、現在、いろいろな団体やグループで、それぞれの市町村で活動しているところも多いと思う。
今、取り組んでいる活動についてどういうイメージをもっておられるか、意見や感想をお願いしたい。まず、県青年団の活動状況について紹介してほしい。

委員 県内の市町村に青年団という組織があるが、よく勘違いされるのは、市町村の職員のみのも組織ではないかということである。青年団は、若者であれば、職種に関係なく、地域貢献、社会活動の活性化などを目的に活動する団体である。現在、県内 500 人ほどが登録している。仕事の関係で、なかなか活動に参加できない団員もいるが、それぞれの市町村で活動を広げている。

現在の活動は、地域に根ざした活動が一番多いと思う。例えば、日向市や串間市ではビーチバレー大会を開催したり、美郷町では、下校中の子供たちの安全を見守る活動を行ったりしている。その他にも、駅伝大会の企画・運営など、地域に密着した活動を展開している市町村の青年団が多いと思う。大々的に大きなイベントを行っている団体は少ないが、自分の住む郷土を愛する若者たちが集まっていると思う。

社会教育というカテゴリの中で考えると、そこまで意識付けできていない部分も多いと思う。若い男女がいる団体なので、出会いを期待して入団する人もいれば、自分の成長のため、知識を高めるために入った人もいる。しかし、そこには大きな差が出てきている。

青年団はあくまでも社会教育団体なので、自分の所属している青年団も市町村教育委員会と密に連携して活動している。例えば、日向市では、勉強会を開いて、男女共同参画、ジェンダーについて学んだり、児童虐待、口蹄疫について学んだりしている。実践が認められ、全国の青年大会で賞をもらった団体もある。しかし、このように教育の時間を設けている団体は少ない現状にある。自分たちで企画・立案し、楽しんで終わるといことが多い。

本年度、自分たちが目指していることは、世代交代が始まっている時期であり、役員の交代でリーダーが脆弱化し、青年団自体が弱まって、解散ということも出てきている。そこで、オルグという形で脆弱化している団体をどう立て直していくかという、一つの教育という場を設ける予定である。学びの場が少ないということで、改めて社会教育団体としての位置付けについて考えているところである。

議長 青年期は一瞬である。青年しかできない、青年だからできるということはたくさんあると思う。それができないと非常に不幸であると思うが、そのような機会をどう提供するかということが私たち成人の役割であると思う。

県内には青年団をはじめいろいろなグループがあるが、それをどうつないで、青年たちに素晴らしい出会いをどう与えるか、それが結集して宮崎の力になると思う。

今の青年層への活動の機会の提供やネットワークづくりについてご意見を願います。



委員 以前、「あかえ子育てフェスタ」の取組について紹介した。今年も 1,000 人を超える参加者があったが、その中でフェスタがうまく進められるのは、中心になって動かす元気のある人たちのリーダーシップが大きく影響している。これがなかったらうまく進まない。その人が要所のリーダーを動かしていく。そして、その人たちがまた下を動かすので、結集して大きな力となる。

青年団の世代交代の話があったが、青年団の中でのリーダーとなる人たちをどう結集させて、社会教育の面に目を向けていくか、動かしていけるようにするか、そのような教育の場はあるのか、リーダーをどう育成して動かすかということがポイントになると思う。世代交代がある時だからこそ必要ではないかと感じた。

委員 毎年、県青年団主催による交流会を含めた一泊二日の「大夜会」という研修会を行っている。役員という立場の分科会、新人青年団員としての分科会、活動資金等について学習する分科会などを設けている。リーダー育成につながればという意味合いもあるが、分科会の中で必ずしもリーダー育成という具体的なものがあるわけではないし、リーダーになりたがらない人もいるので、難しい面もあるのが現実である。

委員 やはりポイントは「人」「リーダー育成」である。

委員 子ども会も年々減少している。地域のリーダーといえば、中高生はジュニアリーダーという組織がある。現在、県内では150名前後しか入っていない。中学生になると進学等の問題もあり、いつまでも続けなくてよいと考える保護者が多くなっているのが現状である。また、比率からいうと都市部より地域性のある郡部の方が残っている。



活動については、遊びを通じた地域活動という部分もあって、遊びの中でいろいろなことを学んでいこう、地域のリーダーとして後輩たちを指導していこうということで活動している。県や九州での研修も実施されており、もっとジュニアリーダーの頑張りや活躍を評価してほしいと思っている。しかし、先ほどのような問題もあって、なかなかジュニアリーダーに入ってもらえない。そこで、宮崎市では、市の広報紙を活用したり、学校にも案内チラシを持参したりして加入促進を図っており、今年は特に加入が増えた。県子連としては、他の市町村にも同じように取組をしてくださいとお願いしている。

私たちとしては、保護者の方に「いつまでジュニアリーダーをやっているのか」という見方を変えてほしいと思っている。活動の内容を見てもらえば、立派な活動をしていることがわかる。コミュニケーション能力も高く、生徒会活動でもリーダーとして立派にやっけていける能力をもった子供たちが育っていると思う。それを保護者や教師にも理解してほしい。

高校の推薦入学の要件にも学力やスポーツの実績だけでなく、ジュニアリーダーの資格もボランティア活動の一環として入れてほしい。そうすれば地域の中高生のリーダーも増える。その子供たちが成長して青年団にも入り、社会性をもった大人になるのではないかと考えている。

議長 子ども会のジュニアリーダーが青年のリーダーの養成機関になる。経験が大事である。社会人になったときの財産になる。

委員 青年団活動で、社会教育という視点を意識して活動することは難しいと言われたが、その活動は十分に社会教育活動になっていると思う。駅伝大会やビーチバレー大会の企画・立案・資金繰りも学んで実践するということは、例えば地域の公民館などで、ふれあい祭りをすることと同じであるし、テーマ1で協議した学習プログラム作りとも相通じるものがある。ジュニアリーダーがやっていることと同じだと感じた。

ジュニアリーダーは中高生であるが、みんなから意見を吸い上げて組み上げ、資金繰り、年間計画まで検討している。企画・立案・実践、そして反省まで行うが、これは地域の公民館でイベントを行うことと全く同じである。こういう人たちが、中学・高校から経験を積んで、さらに青年団でも積み重ねていくと、将来の地域の牽引者になってくれると思う。福岡県の糸島市では、青年団がジュニアリーダーの指導者の母体となっている。このような例もあるので、ジュニアリーダーを卒業した子供たちが、ジュニアリーダーを指導する立場になると同時に、青年団や消防団といった場でも活動を広げて、先々は自治会長などになって、手腕を振るってくれる人になってくれると思う。

それぞれの団体の情報をつなげて、コーディネートする行政の仕組みについて、この会議で提案できるとよい。県内には社会教育主事がたくさんいるが、この人材を県では活かし切っていないと思う。今は教育委員会以外の部署にいる方もおられるが、その部署の課題を教育と結び付けて、新たな課題の把握、社会教育の取組を進めてはどうかと思う。

事務局 社会教育主事の力をフルに活用しなければならないと思っている。テーマ1については、昨年度の提言を受けて本年度事業化し、今回、委員の皆様にご内容の検討をお願いしているところである。テーマ2についても、ゆるやかな連携、プラットフォームの構築ということで提言を受けており、事業化したいと考えている。

今、若者が一つになって活動するということは現実には難しいが、危機感が高まったとき、喜びが一つになったときには、帰属意識が高まる。そこで、いろいろなところで活躍している若者が結集して、一つのテーマに向かって実践する取組を進めたい。イベントの開催も視野に入れて、そこに向かう過程において、若者が企画・立案などのワークショップを通して様々な気付きができるようにしていきたい。そのためにはリーダー育成が重要になる。

議長 青年の活動の母体は各地域だと思うが、それを県全体でどうまとめて一つの力にするか、次回さらに協議を深めていきたい。

(終)